

日時 令和元年 12 月 6 日（金）14 時～16 時
会場 神奈川県庁新庁舎 9 階議会第 5 会議室

○ **青少年課長**

本日はお忙しい中、また非常に寒い中、お出でいただきましてありがとうございます。青少年課長の小出でございます。開会に先立ちまして本日の出欠についてご報告いたします。本日の出席は 9 名中 7 名の出席ということで、本部会の定足数を満たしております。それでは部会長、進行をよろしく願いいたします。

○ **藤井部会長**

それでは、ただ今から神奈川県青少年問題協議会第 9 回企画調整部会を開会いたします。議題は、最終報告書の検討についてとなっております。事務局から資料に基づき説明をお願いいたします。

○ **企画グループリーダー**

（資料 1 に基づき説明）

○ **藤井部会長**

ありがとうございました。それでは、ただ今事務局の方から説明がございました、最終報告（案）につきまして、ご意見等ございましたらお願いします。どのあたりで意見をということとは特にありませんが、気になったところや、追加の情報をいれるなどのご意見、また、第 5 章が提言につながっておりますので、これまでの協議を踏まえて、かつ、検証事業も踏まえましてご意見がございましたらお願いします。

○ **笹井会長**

第 4 章調査結果に関連した、15 ページの LINE や Twitter などのコミュニケーションツールについて、性格付けとして、不特定多数に発信するツールなのか、パーソナルコミュニケーションの拡大版で実名主義というか、相手を分かって発信するののかということは、重要なポイントだと思っています。ただ、インタビューでは、そこに関して私も含めてなかなかうまくできず、分析しきれいていません。メディアツールの性格付けとして、不特定多数なのか特定多数なのかパーソナルなのかという指摘を 15 ページの使用状況に書けないかなと思いましたが。LINE や Twitter、YouTube、Facebook、Instagram は、全て情報受信・発信ツールです。特に Twitter は、私自身も分析があまりできていないですが、複数のアカウントを持って不特定多数の人にもつぶやく、投稿という行為で、情報発信をしています。それが持つ社会的な意味や青少年の成長、発達への意味は私もよくわかりませんが、そういう指摘も含め、今申し上げたことを簡単に 15 ページに書けないかなと思って聞いていました。以上です。

○ **藤井部会長**

これは、具体的にどういう対象に向けて発信しているのかということは、分かっているのでしょうか。アンケートでは、どういう相手に向けてなのかということは聞いたのでしょうか。

○ **田中委員**

アンケートでは発信の対象について聞いていません。

○ **笹井会長**

例えば、LINEの相手はメンバーになっているコミュニティを作っている人達に特定されています。Facebookも基本的に実名主義なので、知らない人がいるかもしれませんが、基本的には知っている人です。ところが、Twitterはトランプ大統領のように知らない人も含めて全世界に発信しています。そういう特性の違いは、結構コミュニケーションへの影響を及ぼすとは思いますが、今回はそこまで報告書に記載できませんが、メディアの特性そのものについては言及しておく必要があると思います。

○ **墓田委員**

深くは追及していなくても、16ページ、アンケートの6番「面識のない他人や不特定多数の人とのコミュニケーションにSNSを活用している」という方が、あてはまる方が割と少なかったことが印象に残っています。そこに通ずるところですけど、ここをもっと深く調べていった方が良かったのかもしれないと思います。

○ **笹井会長**

今後の課題として、新聞などで社会的に大きな問題になることは、Twitterでリツイートして名誉棄損のようになることは、あまりFacebookでは聞かないと思います。YouTubeやTwitterで不特定多数に発信することが、社会的に問題になるような話になってしまっている。やはりメディアの特性は意味があると思います。

○ **墓田委員**

今回アンケートに入っていないですが、最近は小・中学生の低年齢の人たちに「TikTok」という不特定多数で常に100人に情報を流していくという方法もあるため、このことについては、今後の課題になるような書きぶりが必要だと思います。

○ **藤井部会長**

それぞれのメディアの特徴と不特定多数へ向けたコミュニケーションの課題について少し触れておいたほうがいいのではないかとということでしょうか。

○ **田中委員**

今のことに関連すると、おそらく不特定多数の人とのコミュニケーションに活用していなくても、不特定多数の人に発信することはしているのではないかと思います。DMなど、ダイレクトメッセージでのコミュニケーションをアンケートで聞いていると受け止められ、おそらく単なる発信をして、それをコミュニケーションだと回答していない人もいないかと思いました。発信するときのリテラシーも重要だと思いました。発信をきっかけにDMが来て、面識のない人とのやりとりが発生するという事はよく聞くので、そのあたりの発信のリテラシーやDMからのつながりということも今の話に関連すると思います。

○ **藤井部会長**

確認ですが、今回は不特定多数の人とのコミュニケーションについては16ページにある6のアンケートの質問の箇所になるのでしょうか。他に何かもう少し関連するような質問はありましたでしょうか。

○ **田中委員**

インタビューで、委員が質問されている場合はあったと思いますが、定量的には取っていません。

○ **藤井部会長**

他はいかがでしょうか。

○ **牧野委員**

すみません。しばらく欠席していたのでこんなことを申し上げるのも、申し訳ないと思いますが、今のことも含めてですが、いただいたものは、報告書というか、提言になると思いますが、何をターゲットにして、何をどうしようとしているのかを、もう少し明確にできないかと思います。例えば今の議論でも、不特定多数の人たちに対してなのか、特定の人たちに対して発信するのかを分けることが何を解決することになるのか、何をどう見るようになるのかということがはっきりしない感じがします。結局、何が問題で協議会が立ち上がり、何に対して提言をしようとしているのかということに関わるとと思います。それは不特定多数の者に発信することや、リツイートすることは問題が起こるからいけないという議論なのか、それとも根本的に、例えば子どもたちがなぜここまでのめり込んでしまい、ある意味では人間関係がうまく調整を取れなくなり、自殺にまで追い込まれるようなことが起こるのかという議論になるのか、その辺りがはっきりしないように思うのです。この報告書のターゲットというか、何をどうしようとしているのかということについて、少しお考えを聞きたいと思いましたがいかがでしょうか。

○ **笹井会長**

それは、当初からの問題意識としてあります。これまで青少年問題協議会では、孤立化している人や、社会となかなかうまくいかない人をどのようにサポートしていくかという問題意識がずっと続いてきました。その流れの中で、今の若い人の全般的な特徴として、メディア利用がかなり挙げられており、それは若い人たちの成長、発達に大きな影響を及ぼしているのではないかという仮説、問題意識があります。青少年の孤立化、孤独、あるいはひきこもりのような、社会参加と言ってもいいのですが、それをどう進めていくのかという問題意識の中で、メディア利用によって他方、全般的な傾向としてリアルなコミュニケーションと併せて、バーチャルなコミュニケーションの占める割合がどんどん大きくなり、低年齢化し、すごい勢いで普及していることがコミュニケーションの中であります。その中で、情報コミュニケーション、メディアを使ったコミュニケーションを若い人全体の成長にとって、どういうプラスの面、マイナスの面があるかという認識を得つつ、かつ、困難を抱えている若い人たちに、多くの人々がやっているメディアのコミュニケーションを上手に活用してもらうかによって、若い人の孤立化や社会参加促進に対して何かプラスの成果を得られないだろうかという問題意識があるだろうと思います。そういう意味では、通常の行政のやる議論とはちょっとシングルイシューに絞られていないところがあり、それがわかりづらさを招いていると思います。

○ **牧野委員**

おっしゃることはわかりますが、今の議論は例えば、孤立してはなぜいけないのか、困難を抱えていると誰が判断しているのか、そうしたことは全部私達いわゆる外部の大人の観点から言っていることになると思います。例えば、ひきこもってはいけないのかどうか。例えば、N高校のようなものがあり、どんどん広がっています。中には、アクティブラ

一ナーがいっぱい出てきており、自分でどんどん勉強を深めていく子がいる一方で、逆にN高校に入り昼夜が逆転してしまい、完全にひきこもってしまった子も出てくるなど、様々な問題が起こっているように見えます。そうした子どもたちの状況に対して、社会参加を促すという議論で、ひきこもってはいけけないのだというレッテルを貼るのか貼らないのか、価値判断するのকাশないのかということも含めて、ここでは問題になるのではないかという感じがしますが、そのあたりはいかがでしょうか。

もう少し言いますと、なぜここまで例えば子どもや青少年がのめり込むのかといったことも含めて、もう少し報告書の立ち位置を明確にしておく必要がある。限定をかける必要があるのではないかと思います。

○ 笹井会長

わかりました。それは牧野先生が当初から指摘されていたことだと思います。生涯教育の世界では「learning to be」という考え方があり、「be」は上昇することだけが「be」ではないだろう。横に広がっていく、存在そのものの質を良くしていくことが「learning to be」だと思います。基本的に自宅の部屋でTwitterをやっていると、なぜ悪いのかということなどをもっと根本的に考えていく必要があるだろうという点では全く同じです。それはアカデミックにやるのであれば、そういう問題提起から始めないと、きちんとした結論は出ないだろうと思いますが、行政、県の青少年問題協議会としてとりあえず、行政の方で作っていただいた枠組みの中でということで、先生の問題提起はよくわかります。私もそれにすぐく共感する部分もありますが、一応行政の枠組みの中で考えていただければと思います。

○ 牧野委員

それはいいのですが、それはまた、行政のやることの効果をどう図るのかという議論に関わると思います。今、これを全部壊すつもりは全くありませんが、もう少しそのあたりに配慮した形で、この報告書の限界を示す必要があると思います。

○ 笹井会長

それはそう思います。明示的に示すか、暗黙のうちに示すかというやり方もあると思いますが、やはり、限られた期間や予算で、限られたメンバーで行うという限界のもとで、今申し上げた枠組みづくりも、そういう意味では、ある意味で社会通念と社会常識に則った形で、それが今の時代ともしかしたら合っていないかもしれませんが、そういう枠組みの中で、行政が設定していただいた枠組みの中で確認させていただいた中でベターな結論という形の位置付けだと御理解をいただきたい。

○ 牧野委員

反対するつもりは全くありませんが、ちょっと心配はあるということです。

○ 青少年課長

今ご指摘いただいた点について、事務局としてお話をさせていただきます。先ほど牧野先生からご指摘のありました、報告書をまとめ、どういう成果を出し、どのようにしていくのか、それによって提言のまとめ方にも影響してくるという問題意識からいただいたご意見と受けとめました。確かに、報告書の位置付けがわかりづらいと思いますので、3ページの第1章に、どういう事が求められ、果たそうとしているのかということを感じられる形に工夫させていただければと思います。また、実際にどのようにしていくのかについては、今期2年間でまとめていただいたことは、「かながわ青少年育成・支援指針」の改定に生かさせてい

ただければと考えております。青少年に関する分野は、大変広いため、広く意見をいただければ、いただくほど、行政に足りていない部分をどんどん取り入れさせていただきたいと考えております。そういう意味では、あまり枠を設けずに協議会からご意見をいただいております。その一環で、問題意識としていただいたものの中からこうした形でまとめています。簡単に申し上げるとそういうこととなりますが、報告書の第1章にそうしたことを工夫させていただきたいと思っております。

○ 藤井部会長

それに付け加えてお願いですが、これまでどのようなテーマで取り扱ってきたのかということも入れていただきたい。私の理解では、青少年のネットワークの中での議題は今期がかなり初めてというのに近いのではないかと思います。これまで取り組んできた問題の中でいうと、情報ネットワーク社会の中での青少年のコミュニケーションや生のあり方を初めて取り扱ったというところが、少しわかるような形でまとめることができればよいのではないかと思いますので、これまで取り扱ってきたテーマも、可能であれば少し入れていただきたいと思っております。

○ 青少年課長

それについては、整理して相談させていただきたいと思っております。

○ 藤井部会長

他はいかがでしょうか。前回の議論を踏まえて、26 ページ、27 ページあたりが、とりわけ26 ページは、青少年の情報行動から相談・支援の仕組みをつくる、寄添い型の相談支援の場をつくるとまとめられています。前回の議論を踏まえてまとめているのですが、他に追加やもう少し異なる意見等ございますでしょうか。

私の記憶では、墓田委員がお話された内容も少し反映されているような気がします。補足や追加等、関連するところがございますか。

○ 墓田委員

先ほど、孤立してしまい世の中から離れてしまう事や、ひきこもることについてお話がありました。私も正直ひきこもることが悪いこととは、全然思っていませんが、その状態が本人にとってすごく良くて、生きていく術が何かあればいいと思っていることが前提です。やはり、様々な行政の窓口で保護者が相談に行っても、本人が来ないと相談ができない状態だということが難しい。そうではなく、本人を連れてくるのが前提ではない相談の仕組みが、もう少し広がっていくと良いということで、前回、例えば相談所ではないが、麻布十番にお酒を飲むところでキャリアバーという名前でキャリアコンサルタントがバーテンダーでサラリーマンの人たちが転職などの相談に来ているというお話をしました。それが相談窓口だと行かないけれども、そういったちょっと違ったフィルターの中だと来ていることがあるという話をさせていただきました。やっぱり、本人を連れてくるのが前提ということではないし、本人が電話するといったことで、神奈川県にも電話相談があると西野委員からも伺ったと思っております。

○ 西野委員

そういった相談に来ないからしょうがないとか、それはあなたの自己責任だということについて、そもそも、相談所に行き、僕相談があるのでと来るのかということと来ない。僕らの出会っている若者たちは相談所と名のついたところに行かない。自分の相談内容を言葉化で

きないし、相談内容を理路整然とまとめてから出かけていくことができない。でも、思いついたことをぼろぼろ語ることを聞いてくれる環境があると、結構みんな話したがっているということは多い。出会う子どもや若者たちが、こんなに考えていて、こんなに言葉と思いを持っていたのかと思います。でも、さあ相談しましょう、話を聞くよということ、言葉にならないし、そもそもそういう場に出てこようとしない。そういうことに対して、僕は前回のお話を聞いて、真剣にコミュニティースペースやコミュニティカフェのようなところで、若者たちがお茶やお酒を飲み、ごはんを食べに来るところで相談できるところを具体的に検討したらどうかと思っています。

○ 墓田委員

場も、バーチャルの中でインターネットオンラインゲームの中でも、意外とルールが守られており、オフ会のような場で、自分はやはり病気だと思ふとか、学校に行きたいと思っているのだけれどもと、自然な生活の延長線上、困難を抱えていると定義するのであればその子たちが関わっている生活というものがちゃんとあり、その場面ではそういう話し合いがなされていることがあります。それが、そこで終わらずに何かいいものがあればと思っています。すみません、ちょっと違う方向にいつているかもしれませんが、それが日々現場でいつも歯がゆく思うことで、立派な諸先生たちが沢山いらっしゃるので本当にアドバイスをいただきたいなと私は思っています。

○ 西野委員

例えば、むしろ青少年問題協議会が出す方向性の中に、そのことをうまく拾えないかなということが、ずっともやもやしています。そういうハードルを下げた相談について、相談という相互談義からきていると思いますが、つぶやける環境があるといい。

○ 墓田委員

前回、田中委員がオンラインサロンについて、様々なタイプ別に分けることができ、部屋がいくつかあってと興味深いお話をされていたと思いますが。

○ 田中委員

オンラインサロンは、結構活用できています。今、お話を伺って思ったことは、プラスの側面というか、彼らが使っている情報ツールと既存の世界が違うので、併せていったらこっちのカルチャーでもっと吸い上げられることがあるのかもしれない。そちらへの移行ということが、こちらに含まれるといいのかなと思いました。難しいですが、おっしゃるように相談とって待っているというのが私たちの世代にとってのあたり前ですが、若い世代にとっては物理的な制約が大きな障壁であることや、形式ばったものも障壁になるので、そこがうまく表現できるようになっていると良いと思います。情報ネットワーク社会における豊かなコミュニケーションの可能性は十分触れていただいているなと思いました。この報告書の中でもそのプラスの側面に、私たちが発言した内容に触れていると思いますが。そこに目線を合わせていくというか、すいません、整理できないのですが。

○ 西野委員

安心して気持ちを語れるということは、教育の課題からずっと引きずってきているような気がします。日本社会は。思いや気持ちを安心して語れる環境が少ない。正しいか、正しくないか、間違っている、間違っていないという評価の対象として発言の場面があるかもしれませんが、今感じている気持ちはこうだということ、気持ちを気持ちのまま受けとめても

らえる環境が少ない中でだんだん言葉を閉ざしているような気がします。青少年のコミュニケーションはそういった正しいか正しくないかではなく、気持ちを出せるコミュニケーションの場がどうなのか。ある程度大人になってあなたの意見を言いなさいと言われても、すべて安心して出してこれなかったよねという気がします。そのことについてどう書けるか。それはもっと前のところに書き込んであるのでしょうか。6ページの(1)生きづらさを抱える青少年の「やりたいことは色々な体験をしないと出てこないはずなのに、子どもの頃からやりたいことをしなさいと言われて続け、やりたいことがない自分は駄目な人間だと思ってしまい」ということは議論にあったことでしたか。どちらかという、僕の感覚は、やりたいことをしなさいと言われていないというか、やりたいことよりもやらなくてはいけないことが優先されて、やりたいと思わないようになってくるというか、やりたいと思うと、そうじゃなくて今こっちだからと言われ、あなたがやらなきゃいけないことは、これでしょうと言われて、やりたいことを考えると、なんか自分のメンタルが壊れてきそうなほど苦しくなるからやりたいことをつくり出さない。無感情、無感動な自分になっていくような子育て環境のような気がしています。あまり、やりたいことをやりなさいと言われていた社会だったかなということも含めてここに戻ってしまいました。やりたいことをやれない。やりたいことよりもやらなきゃいけないことが優先されている。「したい」より「べき」が優先されている社会で子どもが生きづらくなってきたのではないのかなということが、これはどういう議論から出てきたのかと気になりました。

○ 田中委員

その下の議論はありましたね。個性的であれとか、自分らしくあつてほしいということ個性と言われるけれどもというところはあったと思います。

○ 西野委員

やりたいことをしなさいと言われて続けてやりたいことがない自分が駄目だという議論についてはよくわかりません。やりたいことよりも、やらねばならないことが優先されて、自分のやりたいことが見えないという社会なのではないかと思います。さっきの前提としての気持ちを受けとめてもらえてないとか、そのことと、今これからの青少年のコミュニケーションをどうしていくのかっていうところに、この脈絡ではつなげていくのかなと思います。

○ 笹井会長

生きづらさという思いは、昔からあるような気がします。それが、どんどん社会全体がシステム化されてきて、そこから、それがあつた種の強制ではないですが、生きていくことを一定方向に流れていくことを強制されるような。そういうふうになっているのではないかなと思ってきました。本当は、バーチャルは、そこから逃げるための場所として、存在してきたのだらうと思います。つまり、インターネットの出始めは、例えば上下関係とか国家と国家の関係性などそこから逃れるような形で、コミュニケーションというか、情報のやりとりができる場所があつたと思います。そういう意味では、例えば、犯罪被害者の人達をケアしようという社会運動になっていると思いますし、いじめの場合もそうですがいじめの被害者をケアしようと、それが例えば直接警察に行く、行くまではすごくハードルが高いけれども、例えば電話相談だったらできるといったことが、いじめの場合でも、学校の先生に相談するのはハードル高いけど、電話やメディアを使うのであればすごくハードル低い。メディア利用はコミュニケーション成立においてすごくハードルを下げているのではないかと思います。ハードルが下がるから色々な人が入ってきてぐちゃぐちゃになるのですが、そういう意味では、メディアを利用したコミュニケーションは、コミュニケーション成立に向けてす

ごくハードルが下がっているものなのだから、それを孤立している人や孤独を感じている人が、他者と接触する、やりとりする上でメディアを使わないと損ではないかという意識があります。私自身も、友達や自分の家族に面と向かって言うよりは「今日は帰りが遅くなるから」と言いやすい。面と向かって言うのと何でとうるさいことを言われるから。そういうことがあります、そういう意味でコミュニケーションのハードルが下がってやりやすいなと思います。だから、そういう特性というか、ものを社会と接触してきていない人たちがするとよいのだろうなと思います。それを何か使えないかなと思っております。バーチャル上の居場所みたいなもの、サロンというお話もありましたけども。そういうことができるといいなと思っています。

○ 坂倉委員

今の笹井先生の議論につながるか分かりませんが、全体の感想ですけど、SNSの相談をちゃんとやろうということが書いてあるので、この現代的な情報社会の中で本当にちゃんと見守り、相談することは、これまで通りのやり方に合わせてもらうのではなく、現状に合わせた相談や見守りの体制を作らなくてはならないという意味で、大事だと思いますし、逆にこのように提言した後にこれがどのように実装されていくのかということが本当にちゃんと議論されるといいと、前もここで言ったかもしれませんが、SNS上でちゃんと見てくれているような人が、本当に100人体制で県内にいても全然おかしくないような状況だと思いますし、そういうところに本当に繋がっていくといいと思います。今もう1回見返してみて、25ページのキャラクターについて、キャラクターを人工的に作って情報を受発信している状態というのが、あまり良くないと、自己形成に影響を及ぼす懸念があるというような、キャラを作ってはだめという全体的な流れで書かれていますが、本当にそうなのかなというか、多キャラ状態が多分これから普通になっていくのではなかろうかという気もしており、むしろ本来、色々なところで、色々な側面を見せるのは人間で、インターネットによってそれが何か露見してしまっただけであって、そもそも色々なところで色々な自分を使い分けるということが逆に普通だと考えた時に、重要なことは、そういう状況の中でうまく成熟していけるのかどうかということのような気がします。だからキャラを作ってはいけないと言ってしまうことが若干、苦しさをかえって生む。でも、その状況の中で、自分と社会との関係をちゃんと育ていけるという視点が大事なのかなと思いました。気になった点です。

○ 藤井部会長

そうですね。25ページの(1)の2つ目の丸につきましては、ちょっと表現が強いのではないかと感じます。先ほど、坂倉委員に言っていたように、そういったキャラクターを使い分けの中で、成熟していくような方法を探していく必要があるといったような表現でもよいのではないかと思います。確か、今期の協議会が始まった際にも、これまでSNSや情報ネットワークに対して阻害要因であるとか否定的なとらえ方がされてきたことに対して、少し違った観点みたいなものを出せないだろうかというところがあったように思いますので、少し表現を工夫していただければいいと思います。

○ 青少年課長

今のご意見を踏まえて、記述について検討させていただきたいと思います。

○ 牧野委員

先ほど西野委員がおっしゃった6ページの関係は私の発言です。(1)の上から2番目から3つ合わせて私が最初の頃の会議で発言したものだと思います。西野委員がおっしゃることは

よくわかります。ここで何を言いたいかといいますと、消費社会に入っている中で、常に完成品であることを求められているというか、白か黒か、白であれと言われ続けている苦しさがあるのではないかということをお願いして申し上げました。ですから、先ほど西野委員がおっしゃったように、これをやりなさいと言われ続けることも、ある意味それをやって、完璧にやり遂げなさいと言われていているような状況で受けとめていることにおいては、私も違和感はありません。それが、今のお話で多キャラ化や使い分けという形で自分を分散させていくような戦術をとることに繋がるだろうと思います。それは言い方を変えると、この報告書で使われている言葉も当然、時代のものでしょうがないですが、成長や発達、育成という感覚はもう社会の中になくなってきているだろうなと思います。そういう意味ではその場その場で価値があるものになりなさいと言われていているような感覚の中に生きているところがあり、それは人格を含めて評価されているというような感覚に若者たちがなっている気がします。ですから、受けとめとしても、とにかく評価を回避したいという形での逃げ場づくりのようなことを一生懸命やっているような感じにもなると思います。

自己責任もそうですが、社会は助けてくれないと思っているので、自分で人脈を作らなくてはならないと、特にうちの学生は思っているので、忙しくしています。とにかく、学生から大学も私も信頼されていません。彼らにとって大学は失敗して良い場所ではないのです。失敗してはいけない場所と思い込んでいるので、彼らの中では、ゼミでの失言や、いい加減な発表はしてはいけないことになっています。教員から失敗を指摘されてはいけないのです。指摘すると、逆に自分のことを皆の前で晒した、と私たちはパワハラで訴えられることもあるくらいです。常に、完璧でなければならないことになっているところがあります。そういうことの中で、例えば SNS に逃げて、キャラを演じ分けていくことをやっているのではないかと思います。

今はほとんど議論になりませんが、SNS が出る前に乖離や多重人格の議論が出た頃にやっていたことの SNS 版に近いものに見えます。キャラを演じると昔言っていましたが、キャラ化するというか、それをしているうちに自分は何者なのかわからなくなってしまったという議論が当時あったと思います。それが今 SNS 上で展開されているのかもしれないと思います。今のキャラの議論はもう少しそこをどう逆手に取るかというような議論をする必要があると思って今伺っていました。

○ 西野委員

ゼロ、100 タイプと言われるような、完璧でなくては駄目だという強迫的になっている若者の多さ、その増加を感じます。ひきこもっている子もそういう人が多い。

○ 墓田委員

ひきこもっている子も強迫観念から動けなくなっています。失敗してはいけないということが、常にあります。答えを教えてくださいというケースが多いです。

○ 牧野委員

昔の工業社会のように、養っていくというか、育成していった一人前になるという感覚ではないのです。そのまま、価値があるものになりなさいと言われていているような感覚になっているので、ゼロか100しかない感じになっている。

○ 藤井部会長

他はいかがでしょうか。私の勘違いかもしれませんが、墓田委員からオンラインゲームを

通して相談するといったお話をされていましたがでしょうか。

○ **墓田委員**

そういった話ではなく、オンライン上でゲームをやる中で、色々な世代の人が知り合っており、10代の子が実は学校の先生とオンラインゲームで知り合い、そこでアドバイスを受けて、将来のことを、例えば学校に行かなくても大学に行けることなど、親からさんざん言われても受け入れずに、その学校の先生からの意見を受けて、他を飛ばして大学に行けるという情報を得ているという話をお伝えしました。そこで相談をしているということではありません。ゲームをやりながら知り合っていて、やりとりがされていることとお話したと思います。

○ **藤井部会長**

そういうことも、ゆるい相談と考えられるということでしょうか。

○ **墓田委員**

そうですね。

○ **藤井部会長**

他はいかがですか。

○ **西野委員**

26 ページの 2(1) の丸の 4 つ目「SNS で辛さを言葉にすると悪い言葉につながり、若者を騙そうとする人に繋がる恐れがある。」は、何が言いたいのでしょうか。わかりにくいです。

○ **事務局**

例えば、「家出したい」という言葉を使うと、悪い大人が家においでとつながってくるということについて表現しました。

○ **西野委員**

これは、今説明いただいたことを記述した方が良いと思います。死にたいとか、帰りたくないという言葉は、犯罪に結びつくリスクがある。インターネット上で、帰りたくないという言葉は本当によく出てきて犯罪に結びつき、被害にあうリスクがあります。プチ家出をしている子は随分います。家に帰らなくても、あまり親が気にしていないということもあります。

○ **藤井部会長**

今のご指摘について、文章表現を少し検討するというところでよろしいですか。

○ **青少年課長**

検討いたします。

○ **藤井部会長**

他はいかがでしょうか。

○ **西野委員**

26 ページ 2 (1) 丸の 3 つ目「青少年のケアを行う行政や団体でも、SNS で直接若者とコミュ

ニケーション取っていく必要がある」も、青少年問題協議会の報告書に出てくると、青少年のケアを行う団体や行政でも、直接若者とコミュニケーションをとっていく必要があると言いきっていますが、やっぱり何が言いたいかわかりづらいです。

○ 事務局

一般的な企業の中で、消費者と直接連絡を取り合いながら商品の質を高めるような専門的な職種があるため、行政などでも、SNS で直接若者とコミュニケーションをとっていく専門部署なり、専門業種があつていいのではないかというご発言を基に書いていますが、わかりづらいようでしたら、表現を検討して修正します。

○ 西野委員

具体的にはどなたの発言になりますか。実際に青少年問題協議会から発信して提言という形で出すことは、そういう部署の必要があるまで書いているので、何をしようとするのかわかるように、青少年部局で若者と直接コミットして、何をしようとするのか具体的なイメージがわかるようにしないと何が提言されたかわかりにくい気がします。

○ 青少年課長

ご指摘については、表現を考えさせていただきます。実際に今、県では SNS を使った相談事業が増えています。特に、若い世代は電話をそもそも使わないということがありますので、若い世代ということではじめやDV、私どもの子ども・若者総合相談も昨年度から試行や、今年から始めるなどして増えております。行政も実際に SNS がインフラ的になっている中で、SNS を使っていかなければ、接触できない世代がいるということがあります。確かに、西野委員にご指摘いただいたように、専門的な職種としてそこに貼り付けて、受けとめるというところまではいっていないため、相談の窓口で SNS も始めるということで、戦略的に専門の人を置くところまではいっていませんが、今までのツールとしての電話が合わなくなってきたので、SNS で今までやってきた形を置きたいというような形で始めているところです。ただ、もうちょっと SNS ならではの使い方すとか、特徴をとらえたやり方というのは、行政も工夫していかななくてはならないと思っています。どこまで、そういった状況も踏まえて報告書に書くことができるかは、調整をしたいと思います。

○ 笹井会長

ワーディングの話ですが、行政関係の委員会と関わっていますが、ワーディングの使い分けをしています。必ずやることは、「不可欠である」と表現します。そこまでもないがやってくださいねということは、「必要である」と表現します。他にも「重要である」、「大切である」などありますが、この場合、例えば「一つの方法である」とか、もっというのであれば「検討する必要がある」といったように、使い分けてメリハリを出されるとよろしいと思います。

○ 青少年課長

貴重な助言をいただきありがとうございます。

○ 藤井部会長

他はいかがでしょうか。

○ 牧野委員

26 ページから 28 ページについて、今の議論と関わるとは思いますが、2 の「社会の中で生きづらさを感じている青少年の支援」を、どう 3 の特に (3) までつながるような、子どもたち、青少年自身が、自ら何か新しいもの作っていくような形で社会に展開できるかということで文脈はつながっていると思いますが、そこにどう導くのかという議論も入れたほうがいいと思います。

何でこんな簡単にいわゆる普段の関係では付き合ってもらえないのに、ネットワークでちょっと声をかけられたら、ついていってしまうのか。私はある区の調査に関わっていますが、神待ち掲示板に書き込んで、いらっしゃいと言われると即行ってしまい、ご飯と一緒に食べ、一緒に泊まってしまう子がたくさんいます。なぜ、そんなに簡単に SNS での言葉を信じてしまうのかも含めて、墓田さんがおっしゃるのは、私もそう感じるのは、肯定感というか、自分のことを認めてもらいたいという感覚がとても強いということはあると思います。評価をされない、だから SNS での言葉はある意味では、丸々自分のことを綺麗だと言ってくれることや、大事だと言ってくれるという関係であるかのように思い込んでしまうということが起こっていると思います。そうしたものの中で、私たちが関わっている子の中で、自らそこから抜け出そうとする子たちは、言葉を持っていて、自分のことをちゃんと説明ができ、大人のことを信頼できると思えるような子たちなのですが、大人とそういう関係に入れるかどうかということも重要だと思います。さらに、そこから自分が何かやって役に立っていることや、人からあてにされるという経験を積んでいくことで、随分変わっていくような印象もあります。そうしたものを例えば、この SNS 上で少し組織をして、そっちへつなげるというようなことなのだろうと 3 番を見てそう思いますが、学びをさらに創造の方へつなげて、自分が当事者であるという感覚を身につけること、というような記述が入ってもいいのかなと思います。それをどう行政や団体が支援するのかということが問われているのだという文言も入っていいと思いますがいかがでしょうか。

○ 墓田委員

牧野先生がおっしゃった通り、自己肯定感については、育ちの中で条件付きの承認が多いことがあります。例えば、100 点をとると褒められるが、50 点でもテストに参加したことで褒めてあげればいいのかというように、条件付きの褒めの経験はあるが、無条件で褒められる経験が薄いため、そういった掲示板や見ず知らずの人のやさしい言葉で、「君そのものがすごくいい」ということを言われてしまうについていってしまい、色々な事件に繋がるのではなかろうかという想像があります。やっぱり、条件付きと無条件の違いで、承認も違いがあるように思います。現場では本人たちからそういうことを聞いています。

○ 西野委員

そのことについて、この 10 年、20 年皆そこで苦しんでいます。だから、「ありのまま」という言葉が出てからもう何年かなると思います。ありのままの自分、このままの自分でいいですか、このままの私ではだめですかということ、子どもたちは常に問い続けていますが、これができたら褒めてあげる。これができたら評価してあげるという、存在としての私を丸ごと受けとめてもらえるという経験が、減っているのかどうか。そういうことがずっと出てきている。

○ 墓田委員

そういう言葉はずっと出てきていると思います。でも、実際に対面する若者、子どもたちは言葉に出るのは、自分を認めてもらえていないということが圧倒的に多く、変わらないの

だろうなと思います。評価というところで、いつも紐づけられているというのは生きづらくて。本当にちょっとしたきっかけで、知り合った人と簡単にそれこそ児童ポルノのような被害があるので、それが本当に問題だと思います。

○ 西野委員

そういう丸ごとの自己肯定感が持てない。令和元年度版内閣府の子供若者白書では、自分に満足しているかという問いに、満足していると答えた日本人 10.4%しかいません。本当に海外と比較しても、ずっと自己肯定感が上がらない日本社会。何者かにならなければ、わかりやすい評価ポイントにこないと認めてもらえない。生きているだけで丸儲けとは言ってもらえない社会の中で、苦しんでいます。だから、ネット上でやさしい言葉にふっとついていってしまう。

○ 田中委員

お話を伺いながら、報告書の記載で気になってきたのが、子ども、青少年、若者また、小中学生という言葉が使われています。健全育成と言ったときに、学童期など色々な時期によって、例えば皆さんがお話しされているエピソードも女子高生の話をしている場合と、子どもが小学生みたいなイメージなどがあるような気がします。その辺が、子どもの発達段階と情報みたいなところを少し整理され、それぞれの時に、どういうことに気をつけていくべきなのかといったことがあるといいのかなと思いました。主語が色々変わるということが気になった次第です。

○ 青少年課副課長

「かながわ青少年育成支援・指針」では、「子ども」は 18 歳まで、「青少年」は 30 歳まで、「若者」は概ね 12 歳から 40 歳までと定義しています。おっしゃるように、子ども、青少年、若者について整理されていないので、改めて整理させていただきます。

○ 藤井部会長

先ほどの墓田委員の自分を認めてもらっていないという声を聞くということについてもう少し伺いたいと思いますが、お話できる範囲で構わないですが、どういう文脈でどういった話の中で登場するのかということや、先ほどの田中委員だと、おそらく現実社会の中で、女子高校生がという想像はできるけれどもというお話でしたが、もう少しわかるような形でお話できる範囲で、していただけるならばもう少しお伺いしたいなと思います。

○ 墓田委員

相談にのっている対象は小学校の低学年から、40 代の若者まで含まれています。中学生では SNS で自分のことを投稿し、不特定多数の人から「いいね」と言われることや、評価され、実際に「いいね」といった人と会うことがあり、小学校高学年でも SNS を通じて友人に嫌がらせをするといった相談もありますが、氷山の一角です。

○ 藤井部会長

そうすると提言の中で少しそういう観点から見た場合に、ちょっと物足りないとか、付け加えた方がいいのではないかなというのは何かありますでしょうか。今少しお話を伺っていて、まとめたときは、子ども自身が何か、環境の中で育っていくというイメージで、確か子どもや若者という表現を使っていたように思いますが、先ほどの墓田委員のお話からするとずれている気がします。

○ 墓田委員

お話をするとずれて行ってしまう気がして控えていましたが、やはり大人が考えている世界ではなく、子どもたちの方がいろいろと進んでいるというか、結局、親はいつもスマホをチェックしていましたが、子どもが Twitter などアプリを削除しているので、何もやっていないと思っていたけれども、削除後に復活してそれを見せないようにできる方法など子どもの方が知っているということがありました。私たちが想像している以上の事が起きているというのが最近の私の感覚です。それをどのように言語で表現すればいいかと思います。

○ 牧野委員

少し話が違いかもしれませんが、最近お聞きした、元厚生労働省事務次官の村木さんの言葉に、福祉は黒ずくめの方々には敵わないということがありました。黒ずくめとは、いわゆる反社会的な勢力の人たちですが、その人たちには福祉は敵わないとおっしゃっています。なぜかというと、福祉は問題が起こった弱いところに手を差し伸べて、引き上げつつ、指導、助言する。これでは、子どもはまず何も語ってくれない。反社の人たちは寄り添っていき、どう？といいながら一緒にご飯を食べようよと仲良くなって、君って、こんなに素晴らしい子なんだよと、評価してくれて、連れていってしまう。とてもじゃないけど、福祉は敵わないとおっしゃっています。私がかかわったあるところでの調査でも、そういう実態がすごく進んでおり、大体、男の子は薬物、女の子は風俗で捕まりますが、繰り返してしまうというのです。その時に、何が欠落しているかということ、言葉の問題と認知が歪んでいるという問題があり、それが肯定感が低いという、寄り添ってもらえないという感覚とむすびついていることがどこかにあるようなのです。そうしたのもやっぱりこの SNS 上で問題になることと、どこかで重なっているのではないかと思います。

これらのことは、まとめてしまえば、肯定感が低いということかもしれないけれども、ただ肯定感が低いと言って済ませていいのかということではなく、ちゃんと自分のことを表現できるとか、自分のことを言葉で人にわかってもらえる力があるかということとかかわっていて、そういう力があるのかということ、この子たちには多分ないのです。ですから、このことも含めて何となく全体が、社会の底が崩れている感じがします。そこを SNS など情報ネットワークに限定しながら、私たちは何ができるか。もしかしたら墓田さんがおっしゃったように肯定感や、承認が欲しいということに収斂していく形で、何かが起こっているとすれば、そこにターゲットを当てるということは可能じゃないかなと思いますが、私もはっきりしないところがあります。

○ 墓田委員

私は対話をしていく中で、子どもがなかなか言語化できないため、どんどん質問するといえますか、いろいろ聞いた中で、ここを深めようと深めていくとちゃんと本音が出てきます。日常の中で、深めていく対話が少ないのだろうなと感じます。SNS では、1対1で色々やりとりをすると深まっていく。そこで弱さをつられていくというか、巧みに操られ、深めることによってその人を信用してしまうことが起きるように思います。日頃あまり深まった対話が家族の中にないのかなと、いつも相談する中で思うことです。西野さんもきっと同じですよ。

○ 西野委員

小学生が自分の興味のあることを通じて知らない大人と SNS の連絡先を交換し、トラブルにあったことがあります。SNS はハードルが低い。自己承認の欲求や自己肯定感の問題ではない原因があるような気がします。普通、はじめましてこんにちは。じゃあ家に遊びに来る

か、行きますとはならない。でも、間に SNS が入るとハードルがぐっと下がってしまうのはなぜなのかと思いますが、先ほど牧野さんが言われたみたいに自己肯定感と承認欲求というところでまとめたほうが、ずっとまとめやすいだろうなという気はします。

○ **笹井会長**

よろしいですか。自己肯定感とは私の知っている範囲ですと、リアルなコミュニケーションあるいは、体験の場での色々な積み重ねで生まれてくるのではないかなと思います。

○ **西野委員**

バーチャル世界では生まれない。

○ **笹井委員**

バーチャル世界では生まれないのではないかなと思います。どうでしょうか。

○ **墓田委員**

自分の興味を深めていくというと、それは肯定感というより、その子の満足感ですね。バーチャルだと深まらないのでしょうか。

○ **笹井会長**

満足感は深まりますが、今は満足感さえよければいいという感じになっていますが、自己肯定感はそんなもんじゃないのではないかと思います。

○ **墓田委員**

低年齢では認知というところでは、低いので、満足感というところで何か行動を起こしてしまうことがあるのでしょうか。

○ **笹井会長**

自己肯定感とは、自分を信じるというところがあるわけです。自分が満足するというのではなく、自分を信じるというか、自分の可能性を信じるというところがあるわけです。ちょっとバーチャルでは難しいのではないかと思います。

○ **墓田委員**

いとも簡単に、中学生の子が SNS で知り合った人と平気で会ってしまう。いつも、なぜかと思うけれども、何となくと答えられ、その何となくについて深めていかないとならない。

○ **西野委員**

昔、漫画で喪黒福蔵という心の隙間にドーンというものが流行りましたが、ふとした心の隙間にすっと入り込む。先ほどの反社の黒ずくめの人達ではありませんが、何か心の中にスポンと穴が空いているというか、そこにふっと入ってくると行動が早い。とりあえず動いてしまう。普段、なかなかリアルな人間関係を結べなかった子たちが、ふと気づくと新幹線でいくような場所から連絡してくる。何やっているのと聞くと、SNS で出会った人といわれる。

○ **笹井会長**

誰も心に穴が空いていることや隙はあると思いますが、自己肯定感が乏しいとその穴が

すごく大きいというか、隙間がすごく大きくなるということかもしれません。

○ **西野委員**

なんかそういうところが信じたくなるのでしょうか。自分のリアルな人間関係が大きく、好転すると思えないというか。この社会の生きづらさから、ふと SNS で出会った何か違う世界に行けるような気がするのだろうか。防御する部分が、緩くなるのは何でしょうね。

○ **墓田委員**

防衛や防御ということがあまり感じられない。そういう方たちの相談に乗っていると。

○ **西野委員**

リアルな人間関係には、信頼しないというか、敵対することもあるし信じない。だけど、SNS でふっと動きやすくなるのはなぜなのか。心を閉ざすというか、リアルな人間関係だとハードルが幾つもあってそう簡単に深い話に入っていくかない。けれども、SNS でだとそうではない。信じたいのか。何なのか。

○ **笹井会長**

自分というものが、アイデンティティみたいなのと言っていていいか分かりませんが、自分というものが自分でもよくわかってないというか、人格がよくわかっていない。人格を知るためには、実は他者とのコミュニケーションを通して自分を知るということですが、でもそれにはやっぱり、リアルなコミュニケーションに、嘘が入ってはいけない。自分が知るといいう、自分が気付くということですから。リアルなコミュニケーションの中で、何となく自分が積み重ねてくるものが、そういう自己ということになるかなと思いますが、そういうことは、なかなかバーチャルなコミュニケーションでは難しいので、その限りではやっぱり体験活動みたいなものの積み重ねはとても大事だというのは相変わらずですけども言わざるを得ないのかなと思います。

○ **牧野委員**

今の件と関わって、振り返ることをしなくなった気がしませんか。そういう印象があります。完成ではない。振り返って自分とはどんな人間なのか、どんな存在なのか、少し難しい話になりますが、例えば自分とはどんな子なのかと振り返ってみることをしなくなっているような感じがしますが、そのあたりはいかがでしょうか。色々な関わりを持ってらっしゃって。

○ **西野委員**

振り返るということをしなない。

○ **牧野委員**

振り返らなくなってしまっている。

○ **笹井会長**

何で失敗したのだろうかというようなことですよね。

○ **墓田委員**

ひきこもっている子は振り返りすぎてしまって動けなくなっているという特徴があります

が、そうではなく行動を起こす子の振り返りはどうなっているのか。

○ 西野委員

難しいですね。今、早稲田大学で非常勤をやっていますが、大学生はリアクションペーパーをすごく書きます。なんでこんなに書くのかと思うのですが、でも振り返って書いていないように思います。求められている私像を書いている印象です。わずかな時間に、こんなに書くのかと思います。僕らが日常で会い、不登校で現場にいる子たちは書くということをあまりしませんが、大学生は何でこんなに書くのだろうと思います。でも、それが自分の中を通してきた言葉にあまり聞こえない。この子の心の中から出てきている言葉なのだろうかという。その点、生きづらさを抱えている子達がポツポツって、何かほとんど語らないけれども、語ったときに何か感じるものと。今、振り返らなくなったのは、子ども・若者全体なのか。

○ 牧野委員

先ほどのアイデンティティの話に関わると思っています。うちの学生もそうですが、普通には全く問題はないのですが、卒論の時期に何が問題になるかという、なぜこれについて君は研究するのと聞くと、誰も答えられない。親問題がなく子問題から始まる。とても綺麗な論文を書くのですが、何でこれを研究するのですかという、いけませんか、という話しかしません。なぜ、それがあなたにとって問題になっているのかと問うているのだけでも、考えたこともないというような感じになります。そうすると、論文そのものがとても浅いものになってしまいますから、訴える力がない。それは、今の社会全体の一つの雰囲気というか、何かこういうものかなと思うのですが、その中に子どもは入っていて、例えば自分をつくるということも振り返りながらつくらないとならないところできていない。だから承認が欲しいというか、人が何て言おうと、自分は自分だと思えないという意味においてですが、とにかく評価され続けなくてはならないというところに置かれてしまっている。しかもその評価されることは、親しい人が評価するのは、当然嘘っぽいというか、自分のことを思って評価しているだろうから、不特定多数の人々から評価され続けたいということになるという面も一面あるのではないかと感じています。

○ 西野委員

誤解を恐れずに言いますと偏差値がそうでないところと高いところで言うと、高いところの大学に来ている子たちの定型というか、この範囲をやれば無難にこれぐらいの点数評価になるというスキルとしての文章作成技術や、何かコピペして、形だけ整えて落とされないようにして、ちょっと自分の言葉を入れたようにするといった完成品、成果物を作ろうとするスキルは上がっているかもしれませんが、生き方を問うようなところでは、蓋をしていくというか、あまり深く考えると苦しくなるからとりあえず、成果物をつくり上げるようなことに早い段階から慣らされてきているような気はしています。それは、偏差値の高い大学の子たちにすごく感じます。でも、結構勉強しんどかったよねという子たちがとてもいい、リアクションペーパーも全部この子が素のまま書いているというか、この違いはなんだろうと思います。スタッフ研修をしても、すごく子どもに寄り添えるのは、偏差値がしんどかったらろうなという大学から来た実習生のほうが、よっぽど子どもに近いし、入りやすい。子どももすぐその人と仲良くなる。偏差値が高いところから来る子たちは何していいかわからない。ただ、立っている。そうやって、生きてきてしまっているように感じます。

○ **笹井会長**

Twitterに象徴されるように、その理由を問わずに、つぶやくだけでコミュニケーションみたいなものが成り立つ。そういう時代になっています。180文字では理由など言っていただけませんから、ツイートはつぶやくということですから、知識みたいな、インフォメーションが断片化していつている。インテリジェンスになっていない。

○ **西野委員**

話はいっぱいしたけど、どんどんまとまらなくなっていますね。今日が最終回だと伺っていますが、もう1回できないのでしょうか。

○ **グループリーダー**

一応、最終回の協議会の直前に部会がございますが、直前なのであまり反映させる時間的なものはありません。

○ **青少年課長**

会議でなくても、やりとりをさせていただきたいと考えております。本日いただいた御意見は、なかなか難しい問題なので、どのように表現できるかということがありますが、少なくとも、部分的な条件付きの承認のお話については、背景としてあると思えますし、そういうところが例えばSNSで様々な事件に巻き込まれるところの背景には、間違いなくなっているだろうということもあります。その書き方は証拠があって書けるというレベルではないですが、こういうことも考えられるというものとしてご意見をいただいたものを、反映できるのかなと思います。そして、提言にもそれを意識したものを少しでも入れられればと思えますが、まず案を考えさせていただいて、メールでのやりとりの中でご相談させていただきながら、まとめられればと思えます。

○ **藤井部会長**

今お話を伺っていて笹井先生も言われていたかと思いますが、コミュニケーションといたときに、情報のやりとりであるということや、発信するだけなど、色々な質があるということをどこかで触れておいてもいいのかなと感じましたので、その点も検討していただけたらと思います。先ほどの、犬をきっかけに何かやりとりが始まることや、ストレス発散でななりすましになるという子どものコミュニケーションや、コミュニケーションかもしれないですけども、ちょっと発信をするなど、表面的なという表現がいいのかどうかかわからないですが、簡単なやりとりということも、当然ここでコミュニケーションと言っているかと思えますので、質の違いや対応ということも、伝わるような形に。そうすると、この提言のところにも、少し関わるようなことになるかと思えますので、そこも記述等検討いただけたらと思います。他に何かございますか。ご意見等ございましたらよろしく願いいたします。実質的には今回が最後ということになりますので、こういった意見や、お考え等、必要ではないかというところがございましたらよろしく願いいたします。

○ **笹井会長**

メール等でまた事務局の方にお送りしてもよろしいですか。

○ **青少年課長**

ご意見がありましたらお送りいただきたい。

○ **笹井会長**

事前に、こうまとまりましたというものをメールでいただけると理解していてよろしいということですね。

○ **藤井部会長**

何かありましたら、各委員からメールで意見を事務局にお送りするということがよろしいですか。

○ **青少年課長**

ご意見がある場合は、いつまでにいただきたいということは担当からメールをお送りいたします。

○ **西野委員**

次回には、これが最終案ですとほぼなっているので、その段階では修正が難しくなるのだとしたら、申し訳ないけれども少し早めにいただいて、読んで、意見を出せるタイミングまでいただくとありがたい。それで終わってしまうと思いますので、気になる表現のところが、修正意見が出せるようなタイミングがあるといいです。

○ **藤井部会長**

それにつきましては、改めて事務局から各委員にメール等でご連絡をしていただくということでもよろしく願いいたします。

○ **青少年課長**

承知しました。

○ **藤井部会長**

そろそろ時間が迫ってきていますが、何か是非ということがございましたらお願いします。よろしいですか。それでは皆様のご意見を踏まえまして、最終報告の修正を事務局にお願いいたします。またメール等で連絡、やりとりを踏まえた上で、作っていただくことになるかと思いますが、修正案につきましては事務局から皆様にご確認いただくという形にしたいと思います。なお、その案の最終的な取りまとめにつきましては、私と笹井会長にお任せいただくということをお願いしたいと思います。よろしいでしょうか。

(異議なし)

本日の議題については以上ということでございます。その他何か皆様からご意見、情報提供などがございましたら、オブサーバー課からいかがでしょうか。

(青少年センターから「子どもフェスティバル」について情報提供)

最後に事務局からお願いいたします。

○ **青少年課長**

本日は皆様お忙しい中、ご議論いただきまして誠にありがとうございます。先ほど部会長

からもおっしゃっていただきましたように本日いろいろご意見をいただきましたので、それを踏まえて修正した報告書を皆様方とやりとりをさせていただきます。早めにお送りさせていただければと思っております。

次回は、2月7日金曜日の午前10時から2時間の予定で、企画調整部会と協議会を開催しまして、最終報告案について報告していただくことを予定しております。これにつきましては、改めてご案内を差し上げますので、どうぞよろしくお願いいたします。

これから、案の修正についてやりとりさせていただきますので、お手数おかけしますがよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

○ **藤井部会長**

それでは、第9回企画調整部会を閉会いたします。お疲れ様でした。

以上